

宮城県文化財調査報告書第137集

宮城県文化財保護課

大貫館山館跡^{ほか}

平成 3 年 3 月

宮城県教育委員会

目次

調査に至る経過	1
大貫館山館跡	5
上沼館跡	33
寺池館跡	47
館崎館跡	63
出島貝塚	75
倉崎貝塚	97
花山寺跡	127
小林・神柄遺跡	149
鍛冶沢遺跡	153

例言

1. 本書は平成元年度に宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査のうち、国庫補助事業、受託事業、および単独の調査報告書として別途刊行予定のものを除く遺跡の調査報告書である。
2. 開発工事等にかかる埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては、次の開発担当部局や発掘届提出者および地元教育委員会等から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
田尻町農村環境整備課、中田町建設課、仙台地方裁判所登米支部、東北電力株式会社、宮城県石巻土木事務所・築館土木事務所・大河原土地改良事務所、迫町建設課、株式会社仙台南ゴルフ倶楽部、関係各町村教育委員会
3. 本書で利用した土色については『新版標準土色帖』(1973)を参照した。
4. 本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地図を複製して使用したものである。
5. 本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。
調査に至る経過一進藤秋輝、大貫館山館跡一鈴木真一郎・木皿直幸、上沼館跡・寺池館跡一斎藤吉弘、館崎館跡一吉田雅之、出島貝塚一犬和幸生、倉崎貝塚一阿部恵、花山寺跡一吉田雅之、小林遺跡・神柄遺跡・鍛冶沢遺跡一菊地逸夫
6. 発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会ないしは地元町村教育委員会で保管している。

調査に至る経過

宮城県教育委員会が平成元年度に実施した発掘調査件数は55件に及ぶ。調査の起因としては道路建設、学校建設、急傾斜地対策事業、庁舎建設、区画整理事業など種種にわたるが、これらのうち、主体を占めるのが公共事業にかかわるものである。

本書は国庫補助事業および受託事業を除く発掘調査のうち、宮城県教育委員会が執行委任を受けた事業に係わる発掘調査のうち、単独の遺跡の報告書としては刊行し得なかった10遺跡の成果を収録したものである(表1)。

遺跡ごとに調査に至る経過と調査後の処置について概要を記せば以下のとおりである。

大貫館山館跡は遠田郡田尻町大貫字下山居に所在する縄文時代、平安時代の集落跡と重複する中近世の館跡である。昭和63年11月11日に、田尻町から農村基盤総合整備事業大貫地区曲田～宿線農道改良工事計画と館山館跡のかわりについて、田尻町教育委員会を經由して協議があった。県教育委員会ではそれを受けて、現地を踏査し、館跡を迂回するよう協力を求めた。しかし、昭和63年度事業であることや土地の契約等が終了した段階での協議があったため、ルートの変更は不可能となった。また、当教育委員会としては計画外の発掘調査をする時間が確保できなかったため、道路建設については館跡の掘までを昭和63年度の工事として、館跡にかかる工事は翌年度の調査終了を待って実施するよう要請した。このような経緯のもとに平成元年6月1日～6月27日まで調査を実施した。その結果、土塁、空堀のほか、平安時代の竪穴住居跡を検出したが、記録だけを残し、調査終了後に工事に着手した。

上沼館跡は登米郡中田町上沼字浦沼に所在する別称千葉館あるいは鶴ヶ館とよばれる中世の

No.	遺跡名	所在地	開発事業の種類	開発担当部局
1	大貫館山館跡	遠田郡田尻町大貫字下山居	町道改良	町農村環境整備課
2	上沼館跡	登米郡中田町上沼字浦沼	町道改良	町建設課
3	寺池館跡	登米郡登米町寺池坂小路	裁判所改築	仙台地方裁判所
4	館崎館跡	牡鹿郡女川町針浜字針浜	幹塔建設	東北電力
5	出島貝塚	牡鹿郡女川町出島字別当浜	県道建設	石巻土木事務所
6	倉崎貝塚	登米郡迫町新田字倉崎	町道改良	町建設課
7	花山寺跡	栗原郡花山村本沢字御堂	県道改良	築館土木事務所
8	小林遺跡	柴田郡大河原町小山田字小林	ゴルフ場造成	一般開発業者
9	神柄遺跡	柴田郡村田町大字沼田字神柄	ゴルフ場造成	一般開発業者
10	鍛冶沢遺跡	刈田郡蔵王町大字曲竹字青ノ茎	広域農道建設	大河原土地改良事務所

表1 収録遺跡発掘調査一覧

館跡である。昭和63年7月21日に中田町長から町道浦沼線整備事業計画と上沼館跡のかかわりについて協議があった。工事の内容は館跡の南裾をめぐる現在ある道路を4.5mに拡幅するものであった。現道の西半部150mは郭の斜面に密着して盛土する工法であったが、東半部は郭の平坦部をかなり削平するものであった。突然の協議であったことで、調査期間の捻出が難しかったため、協議により、昭和63年度により、昭和63年度は西半部の150mについて発掘調査を実施することにして、9月27、28日に発掘を実施した。今年度は東半部の発掘調査であり、平成元年6月26日～29日に実施した。その結果、現道下で土塁を発見した。そのうち、削平が大規模に及ぶ部分についてはルートを変更させていただいた。工事は調査終了後に着手した。寺池館跡は登米郡登米町寺池桜小路に所在する近世の城跡である。平成元年7月5日に仙台地方裁判所登米支部の庁舎新設工事と本遺跡とのかかわりについて協議があり、9月6日から26日にかけて事前調査を実施したものである。調査終了後、遺構面から60cmの盛土を施して遺構に損傷を与えないように処理したうえで、庁舎を建設することになった。

館崎館跡は牡鹿郡女川町字針の浜に所在する。東北電力(株)はこの館跡の頂上に設置されていた送電用鉄塔を移設することになった。それに伴う確認調査を7月24日から28日まで実施した。

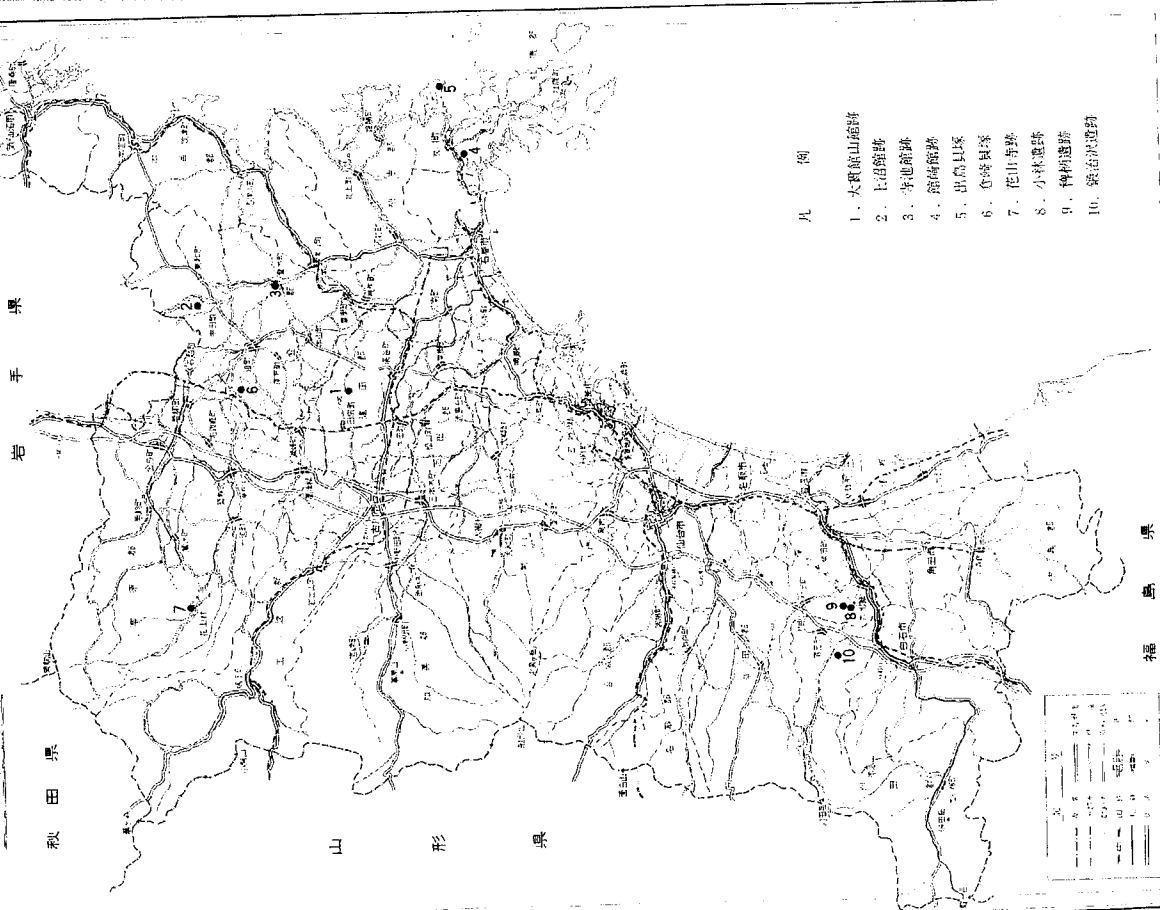
出島貝塚は牡鹿郡女川町出島字山下、余子浜に所在する縄文時代前期と後期の貝塚である。平成元年7月25日に宮城県土木事務所は一般県道出島線の新設工事計画を立案し、ルートの選定の前段階として、本貝塚とのかかわりについて前向きな協議があった。それを受けて、当教育委員会は女川町教育委員会と共に8月1日から8日まで確認調査を実施した。調査の結果、予定の路線の一部が遺物包含層にかかったため、協議のうえ、遺跡をできるだけ避けてルートが選定された。工事施行が平成2年から15年であるため、工事に着手していない。

會崎貝塚は登米郡迫町新田字倉崎に所在する縄文後期から晩期初頭の貝塚である。昭和63年1月9日に迫町が実施していた農村総合整備モデル事業集落道路整備事業で員層がでているとの連絡があり、9日に現地を視察した。その結果、貝層が20cmほどの厚さで、長さ7mにわたって露出していた、調査の日程が確保できなかったため、貝塚を除いた範囲の工事を昭和63年度に実施し、貝塚の部分は平成元年度の調査が終了した後に、保存に留意して工事することになった。以上の経緯から平成元年5月8日から18日まで事前調査を実施した。

花山寺跡は栗原郡花山村本沢字御堂に所在する平安時代末の藤原時代に浄土思想の普及に伴って流行した浄土庭園をもつ臨地伽藍と推定されている寺院である。昭和53年度の調査で御堂と隣前の池およびそれに架かった橋などを検出している。昭和61年6月3日に宮城県築館土木事務所より一般国道398号線改良事業計画と花山寺跡のかかわりについて協議があった。計画路線が本寺の最大の特徴となっている地跡と中島をかけて、伽藍中樞部を東西に横断す

宮城県全図

1:300,000



凡 例

- 1. 大宮山館跡
- 2. 上沼館跡
- 3. 寺池館跡
- 4. 館崎館跡
- 5. 出島貝塚
- 6. 會崎貝塚
- 7. 花山寺跡
- 8. 小林遺跡
- 9. 神代遺跡
- 10. 築館遺跡

第1図 報告遺跡位置図

目次

I：遺跡の立地と環境	77
II：調査の方法と調査の経過	78
III：調査の成果	79
IV：まとめ	89

調査要項

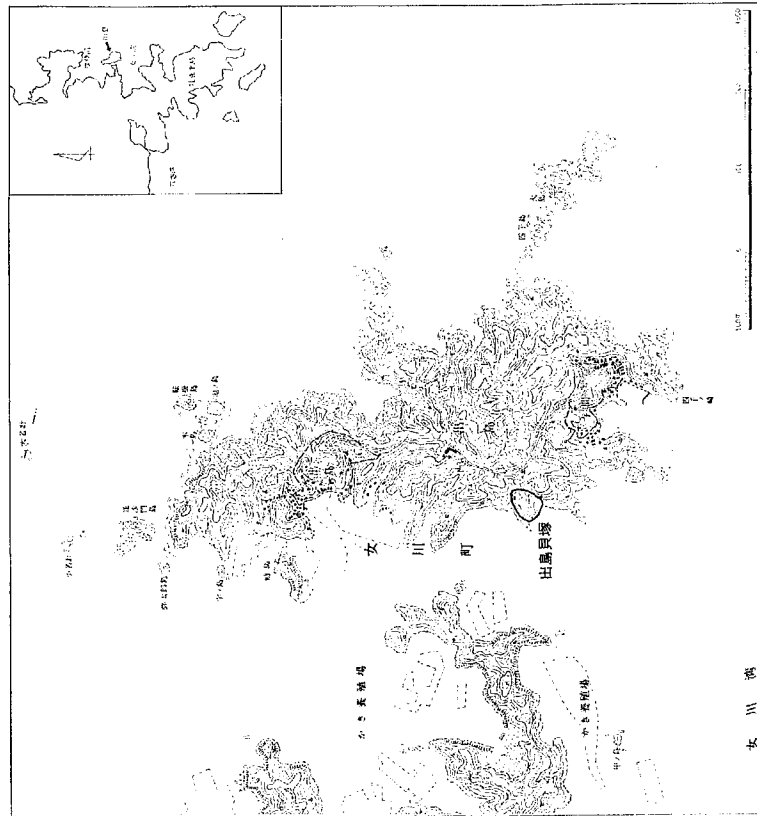
遺跡名：出島貝塚
 遺跡記号：MN
 遺跡番号：73005
 所在地：宮城県牡鹿郡女川町出島寺間山下
 調査面積：約60m²
 調査期間：1989年8月1日～8月8日
 調査主体：宮城県教育委員会
 調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
 調査員：進藤秋輝 白鳥良一 真山梧 菊地逸夫 古川一明 吉田雅之 大和幸生
 調査協力：女川町教育委員会 宮城県石巻土木事務所

出島貝塚

I 遺跡の立地と環境

出島貝塚は牡鹿郡女川町出島寺間山下に所在する。女川町は宮城県北東部に位置し、リアス式海岸で著名な三陸海岸の最南端にある牡鹿半島の付け根付近にあたる。遺跡の所在する島は女川港から北東に約9kmの海上に浮かぶ南北3.8km、東西1.5km、面積2km²の小島で、対岸の岬との距離は300mである。東岸は太平洋に、西岸は女川湾と雄勝湾に面している。遺跡の所在する西岸は東岸に比べ内湾に面しているために穏やかな自然環境で、現在も出島と寺間の集落は西側に立地している(第1図)。

本貝塚は出島の南西岸に位置し、半島状に突き出した標高約40mの台地及びその斜面に立地している(第2図)。遺物が密に分布している範囲は大きくふたつに分かれ、南斜面の貝塚を四子館貝塚、北斜面の貝塚を山下貝塚と呼称していたが、現在は出島貝塚として統一している。ここでは混乱を避けるために山下貝塚を出島貝塚・山下地点、四子館貝塚を出島貝塚・四子館地



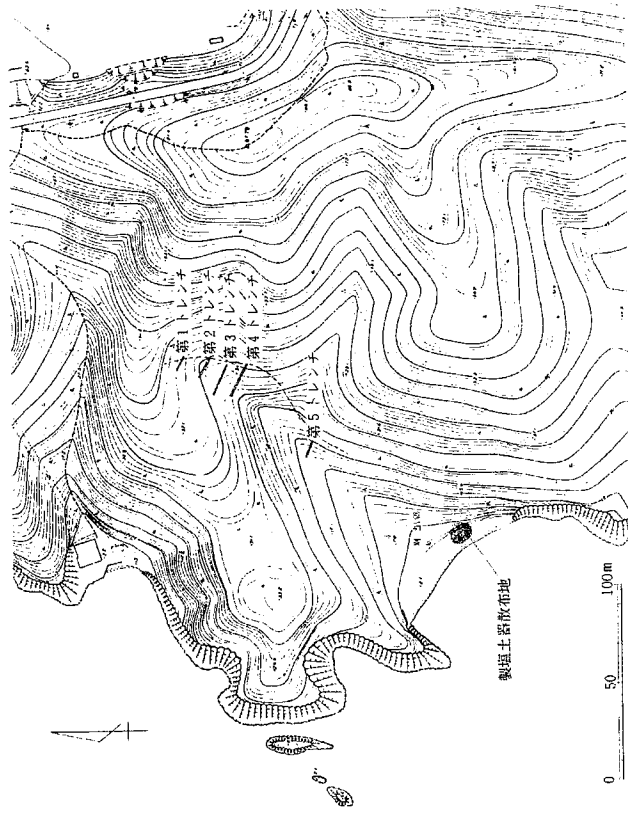
第1図 出島貝塚位置図

点と呼称する。

昭和30~40年代に小・中・大田農林高等学校郷土研究班が調査を行い、縄文前期・縄文後期の貝層を発掘したのは山下地点である(辺見綱高:1971~1974,1977)。山下地点においては前期初頭の土器や多量の後期前葉の土器が出土した。また、石器、骨角器、土製品などや人工遺物やカキ、アワビ、ウニ、マダロ、シカなどの自然遺物が多数出土し、当時の出島貝塚での豊かな生活の一端が解明された。

II 調査の方法と調査の経過

今回の調査は出島と寺間を結ぶ県道の改良工事計画に関連する遺跡保存協議のための確認調査である。計画によれば本貝塚の立地している台地南向かいの尾根が切り盛りされ、斜面下にある本貝塚の遺物包含層の末端が盛土される可能性があった。このためにその遺物包含層の広がり調べをすることを目的とし、台地南側斜面(四子館地点)の沢に直交して計画道路のセンター杭を基準に五本のトレンチを設定した。発掘面積は約60㎡である。遺構等は検出されなかったが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器などが出土した。



第2図 遺跡の立地と調査区

III 調査の成果

1 基本層位

調査区の基本層位は5枚の層に分けることができるが、第1トレンチでは2層の下に基盤の岩盤が確認でき、第2・5トレンチでは3層以下は未調査で、他はすべての層を確認した。第1・2トレンチの全域と第3・4トレンチの堆積土は南と北では異なるが、沢の傾斜や土砂の供給源の差に起因しているものと考え、基本的にほぼ同時期の堆積と考えた。

1層: 10YR4/3のにぶい黄褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は約100cmである。縄文土器、少量の須恵器と土師器が出土している。

2層: 10YR2/2の黒褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は30cm~50cmである。縄文土器、土師器などが出土している。

3層: 10YR4/4の褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は30cm~40cmである。炭化物を均一に少量含む。多量の縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。

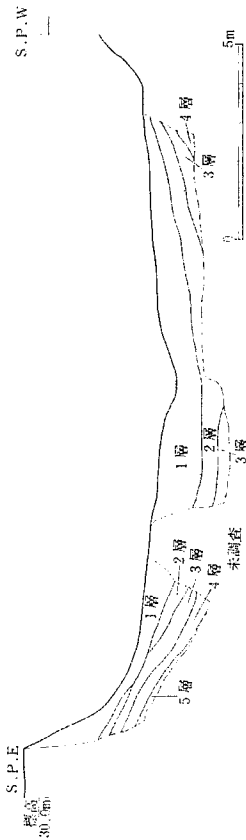
4層: 10YR3/2の黒褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。層厚は20cm~30cmである。縄文土器が若干出土した。

5層: 10YR5/3のにぶい黄褐色を呈するシルト質土と小角礫を基調としている。小角礫の混入の割合が高くなる。無遺物層である。

これら調査区の各層は急斜面下の沢地に堆積し、時代の異なる縄文土器、弥生土器、土師器が混入していることから、いずれの層も集落のあったと思われる台地から廃棄されて堆積した遺物包含層が古代以降に崩落し、再堆積したものと認識した。また、遺物はトレンチ北側の斜面落ち際に集中し、沢の中央付近でやや希薄になるが、ほぼトレンチ全域で認められた(第2図の破線部が遺物包含層の範囲を示す)。

2 出土遺物

今回の調査では遺物包含層の広がりを確認することを目的としたために調査面積が狭かったが、遺物は比較的多量に出土した。しかし、前述の通り調査区の各層が遺物包含層の再堆積層のため、時期の異なる遺物が混入し、遺物の年代的なまとまりに欠けている。したがって、こ



第3図 基本層位 (第3トレンチセクション図)

ここでは各層の遺物を一括して扱い、土器、土製品、石器の順に説明を加えていきたい。

(1) 土器

出島貝塚からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。このなかでも縄文土器は多数を占めているが、すべて破片で、完全な形に復元できるものはない。今回報告する資料は破片のなかでも器形、文様などに特徴を持つ口縁部・胴部資料を抽出し、分類したものである。以下ではこれまでの研究成果に基づいて年代的な位置付けを検討していきたい。

I) 縄文土器

文様により口縁部資料はI類～VII類に、胴部資料はa類～g類に分類できた。口縁部・胴部資料の順にその概略について述べる。

口縁部資料

I類(第4図,1~2)

隆線などにより貼り付け文様や区画が行われるもので、変形「S」字状隆線文(1)と楕円状隆線文が施されているもの(2)がある。器種は深鉢である。

II類(第4図,3~22、第5図,1~3)

沈線により麻手文や渦巻状沈線文などが施されるもので、文様の種類には以下のようなものがある。器種はすべて深鉢である。

麻手文を有するもの(3~4)。方形区画文を有するもの(5)。下垂沈線文を有するもの(6~7)。「ノ」字状沈線文を有するもの(8~13)。無文に沈線が施されるもの(14~16)。渦巻状沈線文を有するもの(17~18)。多状沈線文を有するもの(19)。横位沈線文を有するもの(20~22)。弧状沈線文を有するもの(第5図,1~3)などが含まれる。

III類(第5図,4~19)

平行沈線と帯状縄文による文様が施されるもので、以下の2類がある。4~17は深鉢、18・19は鉢あるいは浅鉢である。

a) 多条の平行沈線と幅の狭い帯状縄文から文様が構成されるもの(4~9)。

b) 平行沈線と幅の広い帯状縄文から文様の構成されるもの(10~19)。

IV類(第5図,20~21)

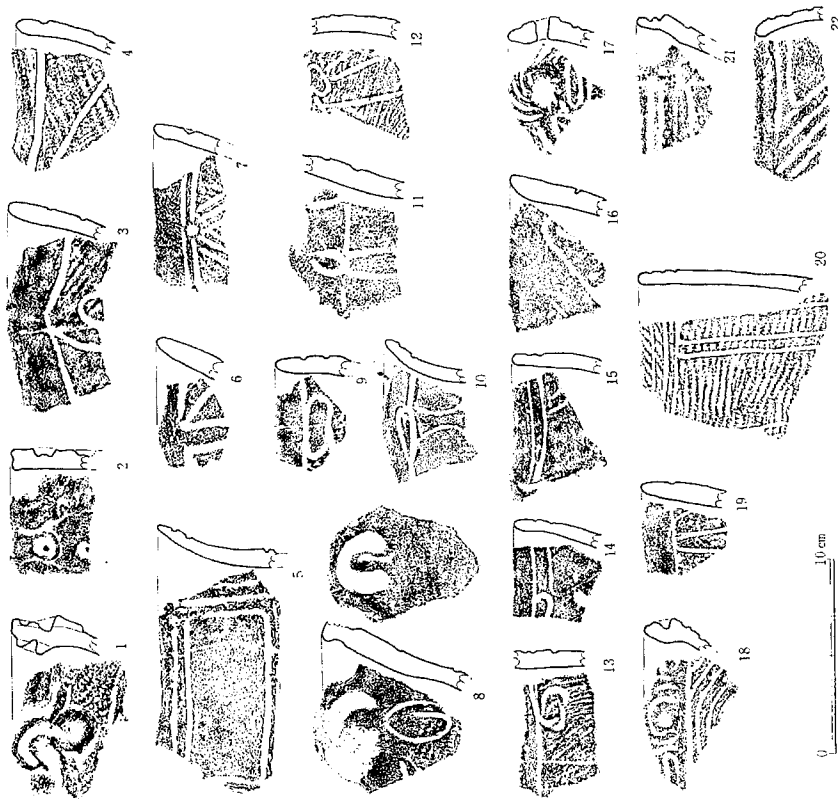
連続竹管文や刺突文が施されるもの。器種は深鉢である。

V類(第5図,22~23)

地文だけのもの(燃糸文)。器種は深鉢である。

VI類(第5図,24~25)

口縁部に沈線と刻み目が施されるもの(24)や、入組文に羽状縄文が充填されるもの(25)がある。24は鉢で、25は深鉢である。



No.	出所・層位	器種	部位	施文	文様の種類	図版
1	4トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	変形「S」字状隆線文	2-1
2	4トレ・4層	深鉢	口縁部	隆線文	楕円状隆線文	2-2
3	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	麻手文	2-3
4	3トレ・4層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-4
5	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-5
6	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-6
7	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-7
8	3トレ・4層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-8
9	3トレ・1~2層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-9
10	4トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-10
11	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-11
12	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-12
13	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-13
14	4トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-14
15	5トレ・2~3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-15
16	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-16
17	4トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-17
18	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-18
19	4トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-19
20	4トレ・1層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-20
21	4トレ・2層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-21
22	3トレ・3層	深鉢	口縁部	隆線文	斜行沈線文(麻手文)	2-22

第4図 縄文土器 口縁部資料(1)

VI類(第5図, 26)

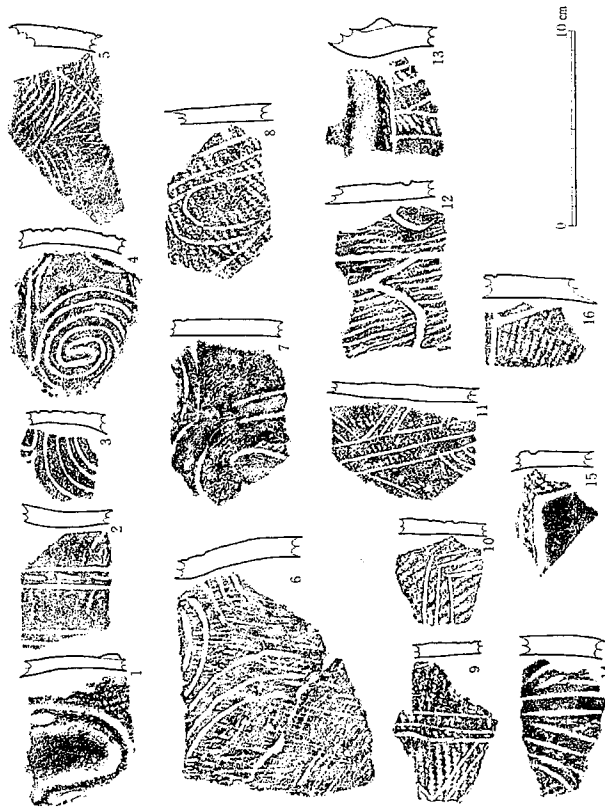
休部に平行沈線、刺突が入り、口唇部に沈線が入る深鉢である。

また、胴部資料については口縁部資料の各類型に含まれるものがあり、I類には(第6図1)、II類には(2~第7図2)、III類aには(3~6)、V類には(7)、VI類には(13~14)などが相当する。

これらの他に、口縁部資料の類型に含まれないものとして、

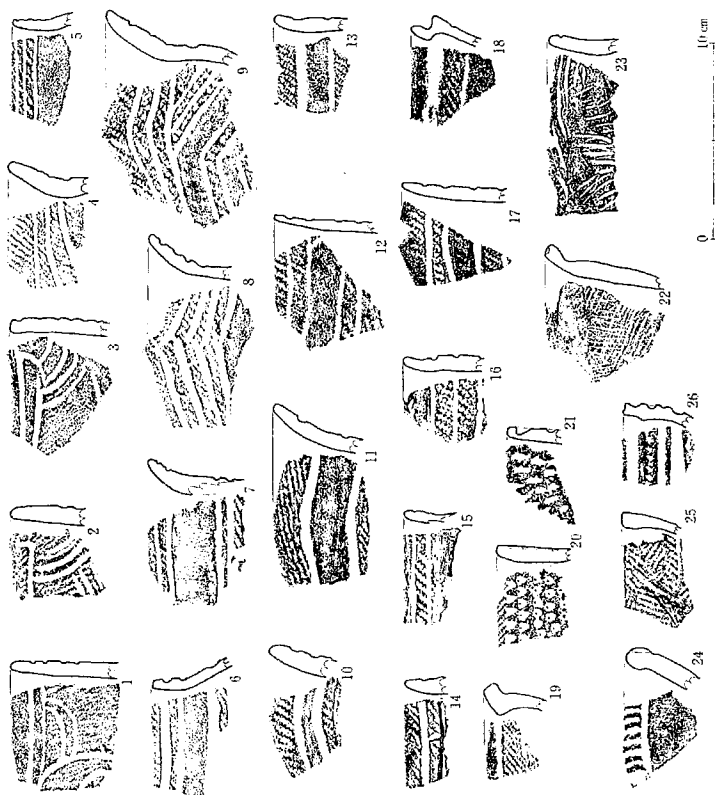
a類：区画沈線曲線文や平行沈線文が施されている深鉢(第7図, 3~6)

b類：横位沈線が施される深鉢(8)。



No.	地区・層位	器種	部位	地文	文様の特徴	図版
1	3トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	横位区画線文	3-1
2	4トレ・2層	深鉢	胴部	区画文	下横位区画文	3-2
3	4トレ・2層	深鉢	胴部	なし	横位区画文	3-3
4	4トレ・3層	深鉢	胴部	なし	横位区画文	3-4
5	4トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	横位区画文	3-5
6	3トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	横位区画文	3-6
7	3トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	横位区画文(器内)	3-7
8	4トレ・2層	深鉢	胴部	区画文	多色区画文	3-8
9	3トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	多色区画文	3-9
10	3トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	多色区画文	3-10
11	2トレ・2層	深鉢	胴部	区画文	多色区画文	3-11
12	3トレ・2層	深鉢	胴部	区画文	多色区画文	3-12
13	4トレ・2層	深鉢	胴部	区画文	区画文(器内)	3-13
14	4トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	区画文(器内)	3-14
15	4トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	区画文(器内)	3-15
16	3トレ・3層	深鉢	胴部	区画文	区画文(器内)	3-16

第6図 縄文土器 胴部資料(1)



No.	地区・層位	器種	部位	地文	文様の特徴	図版
1	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-23
2	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-24
3	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-25
4	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-26
5	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-27
6	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-28
7	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-29
8	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-30
9	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-31
10	4トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-32
11	5トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-33
12	4トレ・1層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-34
13	4トレ・1層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-35
14	4トレ・1層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-36
15	4トレ・1層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-37
16	5トレ・2~3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-38
17	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-39
18	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-40
19	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-41
20	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-42
21	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-43
22	4トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-44
23	3トレ・3層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-45
24	5トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-46
25	5トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-47
26	2トレ・2層	深鉢	口縁部	区画文	区画口縁文	2-48

第5図 縄文土器 口縁部資料(2)

～V類と胴部資料のa類～f類は後期前葉の南境式(伊東信雄:1957,1981)に、III類b・VI類と胴部資料のg類は中葉の堂ヶ峯式(伊東:1957)に、VII類は晩期の大洞C式(山内清男:1930)にそれぞれ比定されるものと考えられる。

なお、南境式については蔵王町二屋敷遺跡(加藤道雄他:1984)において3段階の変遷が示されており、ここではそれに従い県北での類例を求めていきたい。

I類は二屋敷遺跡の第1群土器に相当し、石巻市南境貝塚(後藤勝彦:1974)のA群土器や一迫町青木畑遺跡(加藤:1982)のD群・E類に類例がみられる。II類は二屋敷遺跡の第2群土器に相当し、南境貝塚のB群土器、色麻町大谷地遺跡(茂木好光:1984)の第1群土器、大和町金取遺跡(小野孝一:1980)の第II群土器に類例がみられる。III類aは二屋敷遺跡の第3群土器に相当し、南境貝塚のC群土器(後藤:1974)、松島町西ノ浜貝塚(後藤:1965)などに類例がみられる。IV類・V類とb類～f類の土器については南境式全般にみられ、その詳しい所属時期については不明である。

室ヶ峯式に比定されるIII類b・IV類やg類については、資料数が少なく、まとまりがみられないことから類例だけ求めていきたい。

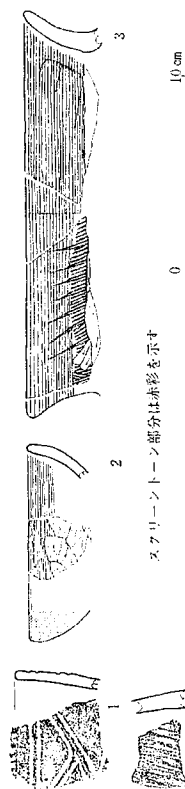
岩手県大庭町崎山弁天遺跡(草間・玉川他:1974)の第V群4・5類の土器、丸森町入大遺跡(一條孝夫:1989)の深鉢B類や気仙沼市田柄貝塚(手塚均他:1986)の第III群土器などに類例がみられる。

2) 弥生土器(第8図,1)

変形工字文が施され、口唇部に刻み目が入る鉢で、沈線に赤彩が残っている。その特徴から鉢形皿式のものと考ええる。

3) 古代の土器(第8図,2～4)

2は土師器環で、体部から口縁にかけてやや丸みを帯び、外面には赤彩が施されている。3は土師器甕で口縁部がやや外反し、体部が球形を呈すると考えられる。3と4は器形の特徴から南小泉式のものと考えられる。また、4は須恵器の甕の体部破片である。



スクリントーン部分は赤彩を示す

No.	地区・単位	器形	部位	記号	特徴
1	3トレ・2・3層	変形工字文	口唇部	刻み目	外面に赤彩
2	3トレ・2層	土師器環	口唇部	刻み目	外面に赤彩
3	4トレ・2層	土師器甕	口唇部	刻み目	外面に赤彩
4	4トレ・2層	土師器甕	口唇部	刻み目	外面に赤彩

第8図 弥生土器・古代の土器

c類: 連鎖状隆沈線文が施されている深鉢(9)。

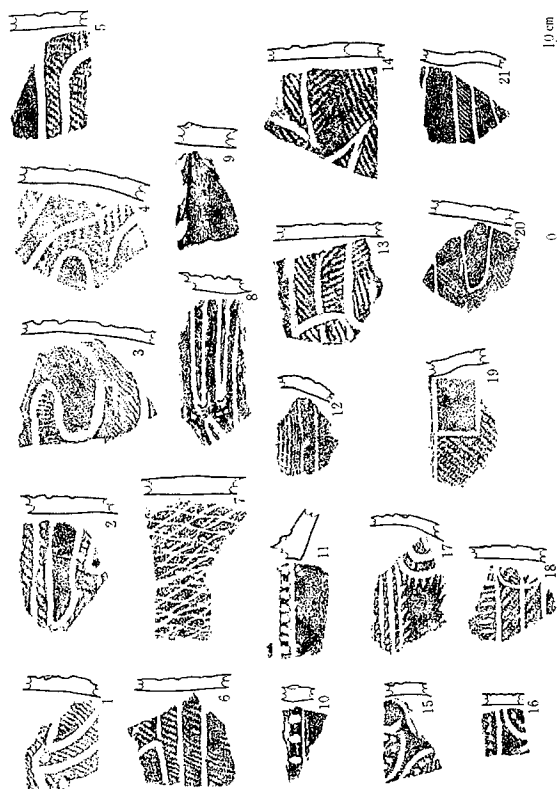
d類: 単沈線入平行沈線が施されている深鉢(10)。

e類: 頸部に連鎖竹管文が施されているもので器種は不明である(11)。

f類: 横位多条沈線文が施されているもので器種は不明である(12)。

g類: 方形区画沈線文や区画沈線文が施されている深鉢で、区画内に連続刺突文が施されるもの(15～18)と施されないもの(19～21)に分かれる。

以上、分類された土器の特徴をこれまでの研究成果に照らし合わせると、I～III類aとIV類

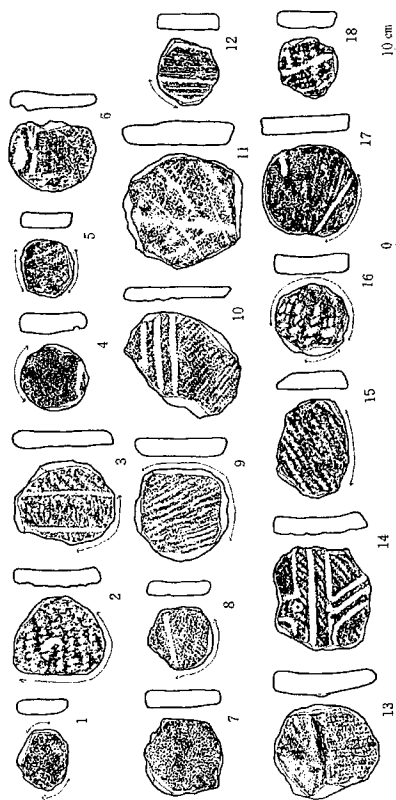


No.	地区・単位	器形	部位	文様	特徴	記号
1	2トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-16
2	3トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-17
3	3トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-18
4	4トレ・2層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-19
5	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-20
6	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-21
7	2トレ・2層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-22
8	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-23
9	5トレ・2層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-24
10	5トレ・2層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-25
11	5トレ・2層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-26
12	3トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-27
13	3トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-28
14	3トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-29
15	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-30
16	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-31
17	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-32
18	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-33
19	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-34
20	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-35
21	4トレ・3層	深鉢	口唇部	区画沈線文	区画内に連続刺突文	3-36

第7図 縄文土器 胴部資料(2)

(2) 円盤状土製品 (第9図, 1~18)

18点出土している。土器片を利用したもので、円形あるいは隅丸方形を呈している。土器片の周縁部を打ち欠いただけのもの、研磨しているもの(研磨部は矢印で示した)がある。11は底の部分を、18は口縁部を、他はすべて胴部破片を利用している。大きさは径5 cm前後のもの、2~3 cmのものにわかれる。利用している土器片の時期はその特徴から縄文時代後期前葉と考えられるが、18は胎土に植物繊維を含み、外面は斜行縄文に押入縄文が施され、内面にケズリ調整されている点から早期末~前期初頭の土器と考えられる。

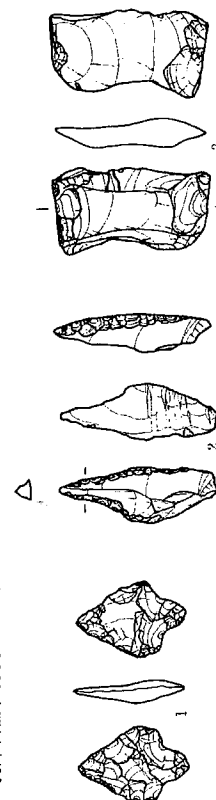


No.	地区・層	No.	地区・層	No.	地区・層	No.	地区・層
1	第2トレンチ2層	5	第3トレンチ3層	9	第4トレンチ2層	13	第5トレンチ2層
2	第2トレンチ2層	6	第3トレンチ3層	10	第4トレンチ2層	14	第5トレンチ2層
3	第2トレンチ3層	7	第3トレンチ2層	11	第4トレンチ2層	15	第5トレンチ2層
4	第2トレンチ3層	8	第3トレンチ2層	12	第4トレンチ3層	16	第5トレンチ3層

第9図 円盤状土製品

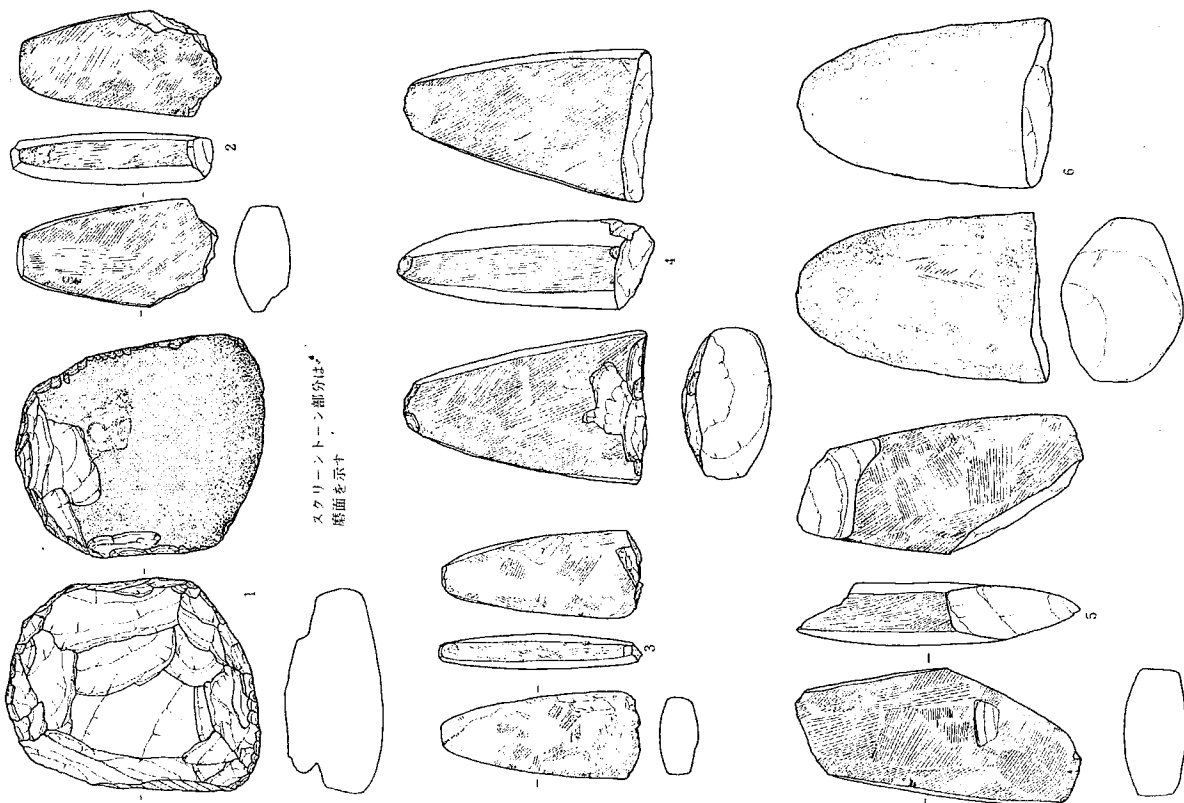
(3) 石器 (第10図1~3, 第11図1~6, 第12図1~2)

剥片石器、打製石斧、磨製石斧や礫石器(磨石、凹石、敲石など)が出土した。石器の形態や



No.	器物	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	寸法	備考
1	石斧	4トレンチ3層	272	181	52	2	181 × 52 × 18	4-18
2	石斧	4トレンチ2層	355	138	82	4	355 × 82 × 19	4-19
3	打製石斧・玉子型	5トレンチ2層	393	241	63	8	393 × 241 × 63	4-20

第10図 剥片石器



スクリーントーン部分は、
磨面を示す

第11図 打製石斧・磨製石斧

磨石が10点、凹石が7点、凹石+磨石+敲石が1点出土している。ここでは凹石+磨石+敲石と凹石を図示した。

1は精円礫の下部縁片に敲打痕を、両面に磨痕と凹孔を持っている。2は両面に凹孔を持つ凹石である。

3. 出島貝塚別当浜地点採集の製塩土器について(第13図)
今回の調査に並行して出島貝塚の分布調査を行い、その結果、別当浜地点で製塩土器が採集された(図版4-30~37)。

第13図に示した製塩土器は、体部外面を軽くナデたのち粘土紐の重ね目を指で押さえているだけで輪積み痕跡がよく残り、内面にはナデ調整が施され、底部からの立ち上がりは直立きみになる。

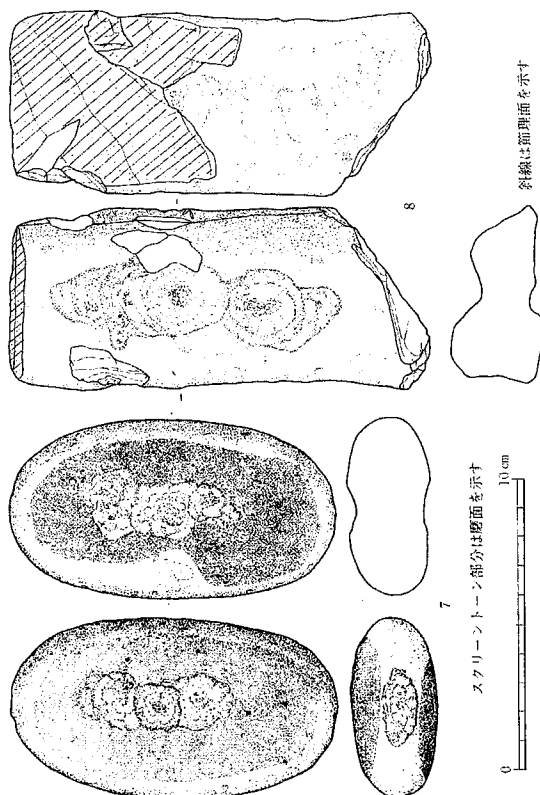
推定底径が19cm、器厚が約2cmある。類似するものには、供伴する土師器から平安時代に位置付けられている塩釜市新浜B遺跡(佐藤則之:1986)の第II類があり、別当浜地点の製塩土器もこの時代のもと考えられる。また、製塩土器が分布している場所には焼土面が露出しており、製塩遺構が存在することが確認された。なお、女川地方では万石浦沿岸に立地する女川町唐松山下貝塚などでも古代の製塩土器が採集されている。



第13図 製塩土器

IV まとめ

1. 出島貝塚は縄文時代早期～古代にかけての重複遺跡である。
2. 今回の調査で検出した層はいずれも遺物包含層の再堆積層である。遺物は南斜面の落ち際に集中し、沢の中央あたりでやや希薄になり、ほぼトレンチ全域に認められた。
3. 遺物には年代的なまとまりは見られなかったが、縄文時代後期前葉の土器が主体を占め、その他に縄文時代後期中葉の土器、晩期の土器、弥生時代の土器、古代の土器、土製品、石器等が出土した。
4. 発掘調査では遺構は発見できなかったが、貝塚が立地する台地上には遺構の存在する可能性がある。
5. 今回新たに製塩遺跡が発見され、出島でも古代に製塩が行われていたことが確認された。



スケリーントーン部分は磨面を示す

斜線は節理面を示す

No.	部	種	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	石	付	備考
1	打製石斧	3トレ・2層	73.0	33.6	23.8	長径短径	凹石		4-22
2	磨製石斧	4トレ・2層	65.1	36.6	17.6	長径短径	凹石		4-23
3	磨製石斧	2トレ・2層	67.0	19.6	11.6	長径短径	凹石		4-24
4	磨製石斧	4トレ・1層	51.8	32.9	17.2	長径短径	凹石		4-25
5	磨製石斧	4トレ・2層	51.0	33.0	14.0	長径短径	凹石		4-26
6	磨製石斧	3トレ・2層	57.0	37.0	12.0	長径短径	凹石		4-27
7	打製石斧	4トレ・2層	51.2	27.3	14.0	長径短径	凹石		4-28
8	打製石斧	3トレ・2層	52.2	33.9	30.4	長径短径	凹石		4-29

第11,12図 打製石斧・磨製石斧・凹石+磨石+凹石

種類から土器同様に後期～晩期のものと思われる。

剥片石器(第10図1~3)

4点出土している。すべて珪質頁岩製である。1は有茎の石鏃である。2は剥片の一端に二次加工により雑部を作出している石鏃である。3は両面剥離痕を有する剥片で、二個一対の刃部を持つ。また、ポイント未製品が出土している(写真図版4-21)。

石斧(第11図1~6)

7点出土している。1は凹石+磨石を再生利用した打製石斧である。2~6は磨製石斧で、2~4は刃部が欠損している。また、4には製作時の敲打痕が残っており、折面には二次加工が加えられている。5は刃部が若干残っているものの、基部が欠損している。6は刃部が欠損し、自然面に僅かに研磨が見られる。これらのほかに磨製石斧の未製品が1点出土している。

礫石器(第12図1~2)

引用・参考文献

- 伊東信雄(1957):「古代史—縄文式文化の変遷」『宮城県史』第1巻
- 伊東信雄他(1981):「縄文時代—縄文土器」『宮城県史』第34巻
- 女川町(1960):『女川町誌』
- 小野寺祥一郎(1980):「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集
- 加藤道雄(1982):「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集
- 加藤・阿部他(1981):「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IX 宮城県文化財調査報告書』第99集
- 草間・玉川他(1974):『崎山弁天遺跡』岩手県大槌町教育委員会
- 後藤勝彦(1957):「陸前宮戸島里渡台岡貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教委教育論文』第2集
- 後藤勝彦(1962):「陸前宮戸島里渡台岡貝塚出土土器について—陸前地方後期縄文式文化の編年的研究—」『考古学雑誌』第48巻1号
- 後藤勝彦(1967):「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第13集
- 後藤勝彦(1974):「縄文後期宮戸Ⅰb式周辺の吟味」『東北の考古—歴史論集』
- 後藤勝彦(1981):「縄文後期の土器—東北—」『縄文土器大成』
- 佐藤剛之(1986):「新浜B遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第113集
- 手塚均他(1986):「田沼貝塚(2)」『宮城県文化財調査報告書』第111集
- 東北歴史資料館編(1989):『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集25
- 林 謙作(1967):「縄文文化の発展と地域性—東北」『日本の考古学』II
- 辺見嗣高(1971):「出島山下貝塚第1次調査概況報告書」
- 辺見嗣高(1972):「出島山下貝塚第2次調査概況報告書」
- 辺見嗣高(1973):「出島山下貝塚第3次調査概況報告書」
- 辺見嗣高(1974):「出島山下貝塚第4次調査概況報告書」
- 辺見嗣高(1977):「出島山下貝塚第5次調査概況報告書」
- 茂木好光(1984):「大谷地遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第100集
- 山内清男(1930):「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の始末」『考古学』第1巻3号